

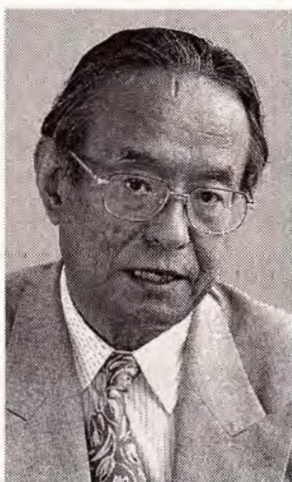
世界で活躍するために

清水の舞台から飛び降りるつもりで、今こそ小学校でも英語を教科として教えることを決断すべきだ。そうしなければ、導入は10年以上は遅れるだろう。

国際教養大学長

お 嶺 雄 氏

な か じ ま 中 嶋



21世紀に入り、さまざまな領域でグローバル化が急速に進んでいる。世界と直結しなければ日常生活もできない。国際言語である英語を身につけることはもはや欠かせない。小学校英語の議論が高まっているのも、日本の経済大国としての地位が揺らぎ、国際社会から取り残されかねない。

この危機感があるからだ。私はアジアでの国際会議によく出るが、英語ができなければ発信もできない。シンガポールや中国の人々が活発に話す一方、日本人は沈黙するばかりだ。これでは困る。韓国など小学校から英語に取り組み国が多いなか、日本はアジアの孤児になりかねない。国際的な視点からだけではない。言葉を感じるのには、耳から入る音楽と同様、早いほどよいからだ。岡倉天心、新渡戸稲造は、いずれも11歳で東京外国語学校(現・東京外

国語大学)に入っている。江戸時代の長崎の中国語通訳唐通事の家訓にも、漢(中国)語は幼少に教えるべきだ、とある。多くの小学校では、すでに「総合的な学習の時間」で英語の活動に取り組んでいるが、それでも3年生からだ。どうせならもっと早く始めるのがよい。

初めての試みだから、心配があるのは当然だ。まず指導者をどうするかだが、あまり堅苦しく考える必要はない。地域を探せば英語の使い手はたくさんいるはずだ。海外留学などの経験者らに専科教員の免許を出せるようにするのもいい。予算を切りつめてはうまくいかない。教員養成、教材開発に十分なお金をかけなければならない。

日本人としてのアイデンティティーが揺らぐと不安がる向きもあるだろう。これは、日本の歴史や文化を扱った教材を英語で教えればよい。導入にあたっては完璧な英語より、コミュニケーションの道具としての英語を身につけさせることを優先すべきだと思う。いま行っている小学校の英語活動は、ゲームなど英語に楽しく接することができよう工夫している。基本的にはこの線がいいが、外国語の学習は国語や算数と同じ重要な教科だという認識が必要だ。

さらに、中学校以降の英語教育を組み立て直し、はらばらだったカリキュラムを実践重視の一貫したものにすることがある。中学校では異文化の世界にふれる意味をもっと重んじることがある。問題を整理し、水路を付けることだと思っている。そこで大切にしたのは、英語を教科にしても保護者を英語塾に走らせないようにすることだ。すべての児童が早くから世界に目を開く教育を考えた。(聞き手・氏岡真司)

36年生まれ。専攻は国際社会学。前東京教育国際語大学長。中央書審議会委員。著書「北京烈烈」など。

早くから英語を教える」と

早くから英語を教える」と

早くから英語を教える」と

早くから英語を教える」と